

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集: FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫

◆◆◆ No.0758 ◆◆◆

23/10/04

【「荒れる為替相場」の終焉近づく?! 10月変動に要注意】

先日終了した9月相場は、月間の変動幅が5.27円となった。依然としてなかなか大きな変動をたどっているとも言えそうだが、実は今年の月間最小変動。そして月間変動が5円台になったのは2ヵ月連続のことになる。昨年3月以降、「月間変動幅の平均がおおよそ8円」というかなり激しい上下動をたどってきたが、そんな大相場の連続がようやく終わりを迎えつつあるのかもしれない。

◎昨年10月は32年ぶり高値151.94円を示現、「円買い介入」も観測

まずは当レターの恒例となっている過去の経験則のうち、1990年以降昨年まで過去33年間の戦績を見てみると19勝14敗となっている。それほど大きく偏っているわけではないものの、「わずかにドル高有利」とは言えそう。

とは言え、方向性という点では大きく目立つ特徴のうかがえない10月相場だが、「まったく動かない」か「非常に激しい動きを示す」か、ふたつにひとつで両極端な値動きを示すことが少なくない—という別の特徴がうかがえる。

ちなみに、2020年の10月相場は月間変動2.08円、年間10位にとどまるなど前者の展開だったが、翌2021年は逆。月間変動幅3.87円となり、年間2位を記録していた。また、昨2022年は変動幅8.41円を記録。周知のようにドル/円相場が年間を通して大変動をたどるなか、10月相場は年間5位とまずまずの位置をキープしていたようだ。

さらに、昨年の10月相場で忘れてならないのは、ドル/円相場は21日に一時151.94円という約32年ぶりのドル高値を示現したということ。また、そんな急激なドル高・円安が進行したこともあり、政府・財務省が前9月に続き10月21日と24日にも再びドル売り・円買いの実弾介入を実施したことも記憶に新しい。なお、財務省発表データによると、10月21日の円買い介入額は5兆6202億円で、一日あたりの金額としては過去最高額だったと見られている。

決して金融の世界に限った話ではないが、「アニバーサリー」という考え方がある。それは過去のある出来事などが起こった日時の数年後、同じような事象が再び起こるというものなのだが、その考えに基づけば今年の10月も月末に掛けての相場情勢をとくに注意する必要がある気もしないではない。

(注: ご存じのように昨日NYタイムに「円買い介入」と疑われるような動きが観測されている。現在鋭意取材中で、来週にも結果をお届けする予定)

いずれにしても、そうしたなか仮に今年の10月相場が、仮に「大変動相場」となった場合、予測不能ともいえるほどの大相場となることもままあることだけは頭にとどめておいて損はないだろう。

その典型事例は、大手ヘッジファンドLTCM破たんの余波を受け、変動相場制以降で一日当たり最大級の下げ幅(一日で約12円下落)を記録するなど、月間で25円以上も動いた1998年になるだろうが、2008年の10月も実に月間変動幅15.67円を記録していた。調べてみると、「10年に一度」程度のスパンで、狂ったような大相場・荒れ模様の変動をたどっているのだが、幸か不幸かここ数年は比較的平穏だ。かなり後ズレしている状況下、期待半分で「今年あたりそろそろ大相場」を演じる10月相場」のリスクがある—と考えるのは、あまりに我田引水過ぎるだろうか。

最後にそんな為替市場に対し、10月の株式市場はともかく荒れる展開をたどることが非常に多い。とくに米株市場にその傾向が強く、それが「悪魔の棲む10月」という言葉を生み出していることも良く知られているところだと思う。

分かりやすい事例を幾つか取り上げるだけでも、米株市場を震撼させた過去の3大暴落「ブラックサザデー(29年)」「ブラックマンデー(87年)」「ブラックチューズデー(89年)」はすべて10月の出来事だった。2000年以降など比較的最近では「秋の株価急落」をたどることがあまり見なくなったとはいえ、為替や株式などに限定したものではなく、10月相場は金融市場全般にしっかりと注意を払う必要があるようにも思っている。(了)

